

## 『衣裳図録 紀州徳川家旧蔵』

文化女子大学非常勤講師・元文化女子大学教授（日本服装史担当） 佐藤 泰子

上下2帙10冊から成る『衣裳図録 紀州徳川家旧蔵』〈WC131/753.21/I/1～10〉は、尾張、水戸両家と並ぶ徳川御三家の一つ、紀州家に伝えられた江戸後期の肉筆衣裳雛形である。上帙には小袖類、下帙には羽織類が各5冊ずつ収められ、折本形式の冊子には、わずかな墨書の頁を除いて、1頁毎に墨一色または部分あるいは全面に彩色を施した原図が貼付されている。本学が本書を受け入れた昭和37年1月には、既に、このような体裁に仕立てられていたが、作画当初の原図の紙質のみが、特に歳月の経過を感じさせる。そこで、付箋に記された外題を含めて、現在の体裁は後年の整理に際するものとみなされる。

女子小袖は、中世の戦乱期において、武家女性の間に打掛姿と腰巻姿が成立したことと、産業の発達による民間生活の向上が衣服を上質化させたことが一体化して、桃山・江戸初期には染織に手を込めて、華麗を極めた。やがて、財力を蓄えた町人に衣服への関心が高まり、続刊された小袖雛形本に時々の流行が伝えられた。江戸後期には、襷模様や縞模様が好まれたことは、美人面の衣裳にも明らかである。しかし、豪商小袖は刺繍や絞りで贅の限りを尽くし、服制による武家小袖は染織上に典型を生じたことにも留意を要する。一方、羽織は、桃山前後期の男子の私服で小袖の外衣であった胴服より転じたもので、<sup>かみしも</sup> 袴が主流の武家服飾においては、準礼服となり、御成の節に徒細頭<sup>かちくみ</sup>が着る役羽織は茶縮緬<sup>ひとえ</sup>単萌黄紐、以下は黒縮緬単茶紐などと定められていた。

第14代紀州藩主の命により旧藩士堀内信が明治34(1901)年に完成させた『南紀徳川史』18冊のうち第16冊(巻147～150)は、本書および関連資料を基底とした服制篇である(216.6/

H/16)。

本書、小袖類5冊の所収内容は、1・2・5冊が売つ身と四つ身を主とし、3・4冊が本裁ち、ここでは成人武家女性用の振袖と留袖を主とする。第1冊の1頁目には、「御売つ身四十二枚 御地兼房(黒染の一種) 葵御紋御裾もやう縫(刺繍の意) 無し御振袖」との墨書が貼付されているが、頁を手繰ると、売つ身の小袖図は40枚で、その中には空色や中色の付箋もみられる。また墨書に「御四身(中略) 振袖二反」とありながらその前後頁ともに留袖であったり、各小袖図には押印のあるものと無いものが混在し、印も多種あって、一様でない。このような状態からみても、各図の配列を当初のものと見なすことは不可能である。そこで、5冊を総じてみると、小袖図は全151図、うち有印97図(同一印75図・その他の印7種22図)・彩色39図、墨書のみ8頁、模様の拡大図3頁、小袖の部分と模様の拡大図1頁と類別される。

売つ身・四つ身は、雪と子犬・水草と鯉・笹に鶏と雛・波と亀等々の組合せ模様を主とし、肉筆ゆえに筆致の異なる同一図も散見される。彩色図は、墨書にある「あい入」「紅ほかし入」と黄・茶・萌黄の濃淡で色挿しされ、1図には着用者を示す「御姫様」の文字もみられる。

成人女子小袖については、『南紀徳川史』巻148の「御簾中様年中御衣服」と「女中衣服定」に着用時節別の詳細が記され、続く巻149の服飾図式に、「菊綸子地白地赤地黒御搔取模様」は五節句の式服、夏は辻、菊綸子は当家に限る由として、青海波や立涌<sup>せいがいば たてわく</sup>等と花束文<sup>かきだ</sup>または折枝文<sup>おりえだ</sup>を交互に配する類の取合模様小袖2図・模様部分24図が示されている。さらに「総縫入御搔取模様」は五節句御召替または御目見願候節に着

用、地合縮緬、萌黄薄萌黄紫浅黄黒桃色等、縫なきを総模様と称すとして、古典文芸に因む風景模様の小袖3図・模様部分14図を掲載し、「御紋なし中縫入模様」は白を重ねて式日御召替に帯付きとし搔取にも着用、地合・地色は総模様同様、縫なきを中模様と称すとして、同じく古典文芸に因む風景の腰模様振袖2図・同留袖1図・模様部分6図を掲載している。明治期に至って、武家女子小袖は海外に流出し、A. ルノワール作「エリオ夫人」等の衣裳に描かれ、ドレスに仕立て直されたりもした。本書には、雲形に牡丹・藤・菊の花束と扇を交互に配した総模様の図に「御綸子又八御辻のもやう」<sup>かきつばた</sup>との添書きがあり、雲立涌に菊折枝文や梅・杜若の花束文等も所収され、また「惣もやうと申ス 冬ハかいとり夏ハ<sup>ぼたん</sup>提帯の事」<sup>さげおび</sup>、「中もやうと申ス」<sup>まる</sup>との添書きもみられて、濃淡の墨蹟鮮やかに卓越した筆致による該当の模様小袖図が頁を埋めている(図1)。

羽織類5冊の所収内容は、羽織図172図、うち背割れのある<sup>ぶっさき</sup>打裂羽織(別名<sup>われ</sup>割羽織)114図(前身と後身39組78図・前身のみ2図・後身のみ34図)、背割れない丸羽織58図、文様図51頁96図(6頁は各1図・45頁は各2図)と類別される。全223頁中189頁には、地色文様ともに彩色が施されている。冊毎の概要は、第6

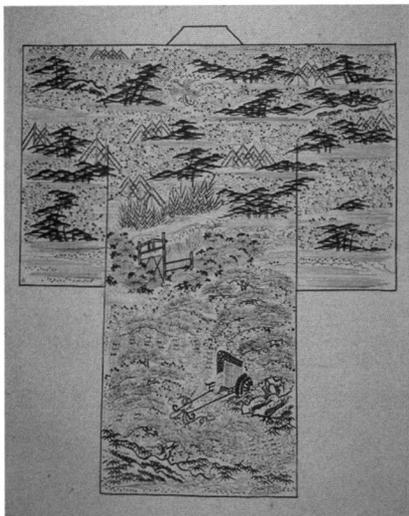


図1 古典文芸に因む風景総模様振袖

上方に北山の庵から逃げ出した小雀、下方に若紫を垣筒見る18歳の光源氏が乗る御所車を描く。

冊に打裂羽織前後34組68図、第7冊に打裂羽織前後4組8図・後身のみ24図・丸羽織6図、第8冊に打裂羽織前後1組2図・前身のみ2図・丸羽織35図、第9冊に打裂羽織後身のみ10図・丸羽織17図・文様図13頁21図、第10冊に文様図38頁75図である。

『南紀徳川史』巻149の服飾図式「殿中服」には、御目見以上は打裂羽織、以下は丸羽織とある。続く「野服」<sup>やふく</sup>の項には、鷹狩<sup>たかがり</sup>や鳥追<sup>とりおい</sup>の折、君上が伊達羽織の時は御供の側近もそれを着用し、冬は木綿裕夏は麻製、いずれも思い思いに伊達を装う(図2参照)、とあり、雛形ありとも記され、名称列記9種のうち「藍地立浪白上り白地雨龍藍上り」と「空色地に裾釣万字白上り」の2種は本書所収図と一致する。また将軍・簾中様より拝領の御品ありの記述に対しても、本書には3図に「御簾中様より」の添書きがあり、天保5~8(1834-1837)年の年記や「公辺筋」<sup>こうへんすじ</sup>「御登城」<sup>ごとうじょう</sup>等の添書きも、由緒ある肉筆雛形ならではのものである。

本書の史料的価値を簡約すると、第1に所用先が明らかであること、第2に武家女子小袖模様雛形のなかで肉筆墨書原図の際立つ秀逸さ、第3に壱つ身・四つ身と羽織類の他に例をみない質量の豊かさ、の3点が特筆される。

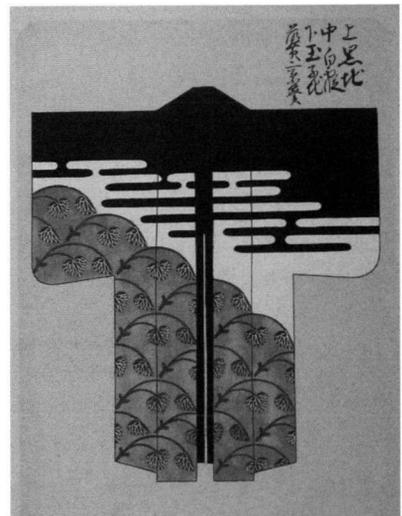


図2 上黒地中白霞下玉子地萌黄二葉葵伊達羽織

本書には黒地が空色の同図色替り後身も収められ、『南紀徳川史』にも同図が掲載されている。